

『望みをもって喜ぶ』 ローマ人への手紙5章1-8節 2019.1.6 新年礼拝説教より

『どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。』 ローマ 15:13

「この希望(5:5)」は、クリスチャンが「神に義と認められ・神との平和を持ち・恵みの中に導き入れられ、神の栄光を喜ぶ者となったこと」にある(5:1-4)！

❶**それでも義とする神(8節)**…「人は皆罪人」の意味がわからなければ「義とされた喜び」は絶対にわからない(イザヤ 64:6)。パウロは、イエスの十字架の身代わりの死こそ神の愛の明確な印(ローマ 5:8)であり、その贖いを信じた者は、罪に汚れた衣を脱ぎ、主の義の衣を着て神の御前に立てると告げる。そもそも罪の始まりは愛なる創り主への背き！アダムとエバは溢れる祝福と平和の中で神を喜び、愛し、たった一つの約束さえ守れば良かったのに神を裏切った(創世記 3:8-9)。その罪深さが永遠の安息を破ったが、神は裏切られたその時に罪からの救いの道を用意する(創世記 3:15)。ここに希望がある！旧約時代の誰もが遥か先に見ていたその救いの実現(ヘブル 11:13)を、私たちは、すでに二千年も前に歴史の事実として見ている！世にある限り、どこまでも弱く、罪深い私たちも、信仰によって義とされ、神との平和をいただき、神を大いに喜びつつ地上の旅路を全うできる！

❷**なんととしても、ご自身の栄光を表す神(5:2)**…この直訳は「神の栄光の望みを、大いに喜んで…」。アブラハムは、「神の都」を待ち望み(ヘブル 13:10・16)、創世記 1:28 の通りに、人類が神の祝福を得て、世に「神の国」を築き、万事において神の栄光を表わすことを期待していた。しかし人は罪ゆえに神の栄光を現すことができなくなる(ローマ 3:23)。罪(的はずれ)とは、神の栄光より自分の栄光を求める人の姿のこと。しかし神は、信じた者を「恵みの領域に引き戻される(5:2) ⇒ローマ 8:30！天才音楽家のバッハの楽譜の最初に「JJ(イエスは助け)」とあり、最後はSDG「ただ神に栄光があるように」と感謝と讃美で結び、全ての栄光を神に帰した！

★イエス様の贖い(身代わり)を信じて、義とされ、神との平和をいただく人は、どんなに弱く、どんなに苦しく、不遇な人生であっても、その中でも、喜んで生きることが出来る。何より、神の栄光の輝きを喜び、神ご自身を喜び、希望をもって人生を全うできる！『この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。』 ローマ5章5節